

「税務出納課」を新たに設置、町立高校設置に向けた町民意見交換会

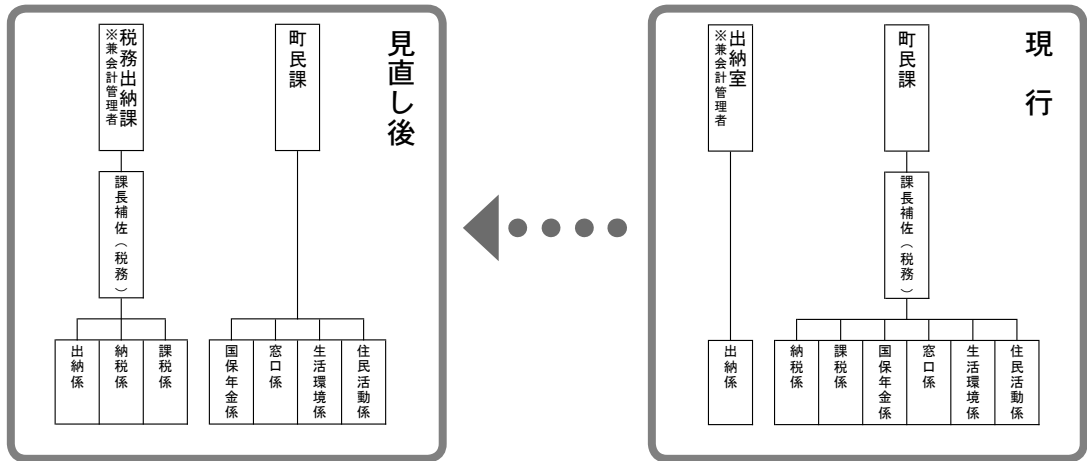


新たな課が設置されますが、現在の税務部門や出納部門の場所に変更はありません。

4月1日から「町民課の税務部門」と「出納室」を統合し、新たに「税務出納課」となります。

現在の組織機構は、平成22年に住民の利用が最も多い窓口部門として、従前の住民生活課と税務課を統合し、横の連携による住民サービスの向上を目的としていました。しかし、「税務の名称が無くなつたことにより、住民にわかりにくい面がある」「業務内容のつながりの面からは、税務と出納の関わりの方が深い」とのことから、より住民サービスの向上につなげられるように今回、組織の見直しを実施します。

「税務出納課」を新たに設置
組織機構の見直しにより4月1日から



「町立高校が本当に必要なのか」賛否両論の声

町立高校設置に向けた町民意見交換会

町立高校設置に向けた町民意見交換会が2月1日に屈足総合会館2日に公民館で開催され、屈足会場に24人、新得会場に30人が集まりました。

町教育委員会の担当者から町立高校設置の背景や経過、初期費用や年間コストなどの財政負担、平成31年4月開校に向けたスケジュールなどについて説明がされました。

その後の意見交換会で参加者からは「町立高校が本当に必要なのか。まず、道立高校がなぜ募集停止になったのか検証が必要ではないか」「町として町立高校が必要というが、町民の誰が賛成しているのか。多額のお金をかけて返せるビジョンはあるのか。腹をくくってできるのか聞きたい」「これから高校に進学する子を持つ親がここに何人来ているのか。町民の意見をもっと聞く場を作ってほしい」など反対意見や慎重な対応を望む意見が出ました。

また、「作るのであれば使える社会人として育成する道場にしてほしい」「特色があり魅力のある高校を産業として位置づけ、町を盛



り上げられるのであれば良いと思う」などの賛成意見も出ました。

町教育委員会では「現在、町立高校設置を検討していくスタート段階で、今後、町民の意見を聞きながらしっかりと議論をしていきたい」と話していました。

冬休みなかよし学習塾、調理実演 & ランチ試食会 ほか



海水を使っていろいろな体験
冬休みなかよし学習塾

冬休みなかよし学習塾が1月7日、8日に屈足南小学校で開かれ、児童とボランティア合わせて約90人が参加しました。

7日は、ワークシヨップ「海水から塩づくり」と題し、カセットコンロを使って海水を塩とにがりに分ける作業にチャレンジ。昼食にはその塩で握ったおにぎりを食べました。

8日は、「ざる豆腐とアイスクリームづくり」が行われ、前日に作ったにがりと塩を使用しました。

子ども達は、海水がいろいろなものに变化する事に驚いた様子で、いろいろな体験に興味津々でした。



楽しく、おいしく食べて子育てに力を
調理実演 & ランチ試食会

早川喬恵の十勝・新得産が美味しい調理実演 & ランチ試食会(町全町教育推進本部食育部主催)が1月17日、共働学舎カリンパで行われ、子育て中の夫婦ら約20人が参加しました。

講師には、十勝産食材フードコーディネーターの早川喬恵さんを迎え、十勝産、新得産の野菜や食材で作るグラタンやミネストローネなどの調理実演が行われ、その試食を行いました。

参加者は、調理実演に興味津々の様子で、食い入るのを見ており、作られたおいしい料理に舌鼓をうっていました。

選挙ってどんなもの？

新得高校で選挙の模擬投票



選挙権の年齢が18歳以上に引き下げられることに伴い、選挙の模擬投票が1月26日に新得高校で行われました。

同校では、3年生を対象に選挙の授業を3時間設定し、選挙の大切さなどを学んできました。

模擬投票には、町選挙管理委員会の職員3名、同委員の柴田信子さんの立ち会いのもと、投票の受け付けから始められ、生徒13名はそれぞれ記載台で政党名を書き、投票箱に一票を投じました。

受講した林穂佳さんは、「選挙に投票することについては、授業を受けて重要だと感じたので、選挙権を持つたら投票に行きたいと思う」と話していました。

埼玉の高野さんらが移住体験

移住体験モニター事業



サホロスキー場 Gondolaステーションで就業体験中の高野さん

北海道が実施している就業体験と移住体験をセットにした移住体験モニター事業(NPO住んでみたい北海道推進会議主催)が1月26日から7日間行われ、埼玉県在住の高野知郎さんと朱紗丸裕子さん親子ら3人が新得町での暮らしを体験しました。

就業体験では、高野さんはサホロスキー場やクラブメッド北海道でリフト係員やバルボーイなどを行いました。

高野さんは「念願だった冬の北海道を体験できた。仕事も体験でき、自分たちでも生活できるのではと思えました」と話していました。